
黒ずきんと美味しい動物達

那須1号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒ずきんと美味しい動物達

【Nコード】

N9171B

【作者名】

那須1号

【あらすじ】

今日も美味しい美味しい動物達を黒ずきんちゃんが美味しく、いただきます

僕は美味しくないよ

雲に隠れていた月が徐々に姿をあらわす

血に染まったその町を

―カッン、カッン、カッン

ヤツの靴音がレンガの道に反響し、ヤツとともに僕を追いかけて来る

「ハアア、ハア、ハアッ」

ヤツは決して速くない一定のスピードで追いかけてくる

僕が遅くなればヤツも遅く、僕が速くなればヤツも速く、かといって歩けない

ヤツはやる気の無くなったヤツには容赦はしない

―ドサッ

「？」

・・・・・・・・・・転んだ？

逃げなくちゃ！！、でも頭が回らない、体が動かない

―カッン、カッン、カッン

ヤツ近づいてくる

「転んじやったね。・・・・ハア、追いかけっこにも飽きたしい

「モウイイヤ」

そう言つてヤツは身の丈ほどのナイフとフォークをかまえた

「君のお友達はさあ、たくさんいて食べごたえあつたよ。でも私もたくさん食べたからお友達はもう

いないよ。―キミガサイゴ。」

血で真つ赤に染まつたナイフとフォークが不気味に光る

「いただきま―す。最後の―クマサン」

僕が最後に見た光景は、黒いずきんをかぶつた少女がナイフとフォークを上手かたいに使い

僕の体を切り刻む・・・ようやく頭が回つた

「そうか僕は食べられるんだ・・・！」

―目の前が真つ赤に染まる

バリ、バリ、バリ、ゴキツ・・・ベキツ、ポキ

ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ

ヤ―ペロツ

「ご馳走様でした」

少女の食べ方は決して上手くない、顔や手や黒い服も血の色に染まつている

確かに食べ方は決して上手くはないが後に残るものはほとんどない体はもちろん、骨や毛さえ・・・

残つたものと言えは辺りに飛び散つた血くらいだ

―クスクスクスクス

少女は笑う

私に来るまでここにはたくさんの友達^{クマサン}がいた
でも、もうここには私しかない

—クスクスクスクス

血塗られた町に少女の笑い声が響く

「さてと、」

真っ赤に染まった口の周りを黒い袖で拭く

「次はどこに行こうかなあ」

—カッン、カッン、カッン、カッン、カッン

「はあ、クマサンは正直、美味しいわけでも無かったなあ・・・」

—カッン、カッン、カッン、カッン、カッン

「でも、あのポリウムはよかったなあ・・・」

—カッン、カッン、カッン、カッン、カッン

「おなか減ったなあ・・・」

—カッン、カッン、カッン、カッン、カッン

—ピタッ

「次は・・・アレニシヨウ」

「ねえねえ、知ってる」　ウサギが聞く

「・・・アレのこと？」　ウサギが返す

「うん、今度はクマサンたちの町がやられたらしいよ」　ウサギが答える

―町がやられる

それは、誰もいなくなった血塗られた町のことを意味する
居なくなった者たちはどうなったのか、なぜそうなったのかは誰も知らない

知ったものはみんな食べられたから

―クスクスクスクス

いつのまにか、彼らの前には黒いずきんをかぶった少女がいた
「こんにちは」

黒いずきんをかぶった少女がやさしく微笑みかける

「こんにちは」

「こんにちは」

2匹のウサギが答える

黒いずきんをかぶった少女はやさしく微笑みかけながら町の方へいった

「人が来るなんて珍しいね」　ウサギは言った

「何しに来たんだろう？」　ウサギは聞いた

「・・・何だろうね？」　ウサギが答える

「・・・タベニキタンダヨ」

「？今なにか言った・・・」　ウサギは聞いた

「別に何も？」　ウサギは答える

「・・・そう、ならいいんだけど」　ウサギは言った

――クスクスクスクス

ウサギ達は知らない、もうすぐでこの町からウサギがいなくなり町は血で染まることを・・・

「それじゃあ、――イタダキマス」

僕は美味しくないよ（後書き）

皆様お初にお目にかかります

那須1号です

はじめて書いたものなので読みにくかったり、漢字が間違っていたりするかもしれませんがよろしくおねがいします
ご感想などありましたらどうぞお願いいたします

私を食べる？

今日もいつもと同じつまらなく平凡な日常が過ぎていくのだと思っ
ていた・・・

ヤツは太陽が隠れ月が姿を現すと同時にその本性をあらわした

「助けてえ」

静寂すぎるその町にひとつの声が響いた
いつもの町なら聞こえなかっただろう
だが今日は違う・・・ヤツが来ているから

ああ、あの者もう助からない
ヤツに捕まっちゃったから

ヤツは追いかけてここで諦めた者がいると悲しそうな顔をする
だがそれは一瞬だけ

次の瞬間にはそいつにナイフとフォークを使い体を切り刻んでいく
最初は首

そうすればもう動かなくなつて食べやすくなるから
あとは好きなところから食べていく

ああ・・・美味しそうだなあ

あの少女が食べているところを見ているとこっちまで食べたくなる
し、あの幸せそうな表情を見ているとこっちまで顔がほころぶ

近くから見ると死体に群がる鳥・・・
遠くから見ると大きすぎる肉をへたなりに美味しく食べている少女
にしか見えない

美味しそう

ゴリ、ゴリ、ゴリ

ああ、なんて美味しそうなんだろう
今少女は友達の頭蓋骨を食べているところだ
気持ち悪いなんてまったく感じない

ゴキツ・・・クチャ、クチャ、ピチャ

今脳みそのところをすすっている
脳の中身はもう原型をとどめていない
グチャグチャになった液体に赤い液体が混ざっている

・・・？アレは何だろう

ペッ

なにか丸いものが口から出される
・・・ああ目だったのかあ

やっぱり美味しいのは目の周りのどろどろしたところだよなあ

目、自体はそれほど美味しいわけではないんだよなあ

次はどこを食べるんだろう？

「きゃあああああ」

少女の食事の姿を見たのだからあんな声をだした

「五月蠅い」

せつかくいいところなのに私の楽しみを邪魔するなんて

少女がゴハンを放り出してあの兎に近づいていく
さっきまでの少女の目とは違う

あの幸せそうだった目が一瞬にして殺気に満ちた目になった

……少女も怒っている？

……そっか考えることは一緒なんだね
楽しい楽しい食事をするためにはマナーを守らないといけない
出来ないものには立ち去ってもらう

少女がゆっくりあの兎に近づいていく
フフフフフフ

自分でも気がつかないうちに笑みがこぼれていた
さて、どんな風に食べるんだろう

あの兎は震えていた

でもあの少女は食べることをやめようとはしない

一歩、また一歩

あの馬鹿な兎おろかに近づいていく

―グサッ

ちょうど左肩を切断した

「ッ！グイアアアアアアアアア！！！！！！！！」

うわぁ、すごいバツサリいったなぁ、骨まで見える！・・・にし
ても五月蠅いなぁ

少女が切り落とした左肩を拾い上げ口元まで持っていく

―ゴリ、ゴリ、ゴリ

プププププ

・・・あの顔！！！！

自分の手を食べられるところを見て金魚みたいに口パクパクして・・・

あの目も！！！！放心状態ってやつ！？

アハハハハハハ

アハハハハハハ

アハハハハハ・・・

・・・

―あの少女の食べるところはとても美味しそう

•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
		•
		•
		•
		•

自分の右手を見つめる

綿みたいな白い毛が生えている小さな手

—あの少女の食るところはとても美味しそう

手の先を自分の口に近づける

—こんな私の手も

手を口の中え入れる

—オイシイノカナ？

―ガリッ

―フフフフフフ

馬鹿だなあ……

兎は草食動物だよ、噛みきれぬわけなのに……
口の中に毛がへばり付いて気持ち悪い

自分の手なんて

「タベチャダメダヨ」

なんだもう食べ終わったのか

私の目の前にはずきを被った少女が立っていた

「あなたの手を……ううん、貴方を食べるのは私なんだから
そうだったね

「だから自分の手なんて―タベチャダメダヨ」

―カッン、カッン、カッン

食事中の死神が慌ててやってきたみたい

だって手には死神の鎌じゃなくてフォークとナイフなんだもん

―カッン、カッン、カッン

少女がナイフとフォークを構えた

あっ・・・そうだ

「私は美味しくないかもしれないけどいいの？」

この言葉は命乞いでもなんでもない

ただ私なんかを食べてもらっていいのか気になっただけ

この言葉にこめた気持ちがわかったのだろうか

「大丈夫、私が食べるのはどんなものでも美味しくなるんだよ」

少女は笑った

「そう、よかった」

私も笑った

「イタダキマス」

私、たべられる死ぬんだ

ねえ私

最後に聞きたかった言葉があるの・・・
聞いていいかな

最初に来た時のあなたは黒い服、黒い頭巾で全身黒でまるで烏のようだった

でも今は違う

赤い服、赤い頭巾……

「ねえ……貴方はアカズキンナノ？」

少女の手が一瞬震えた

少女はナイフを私の首のすぐそばまで持っていた

「……違うよアカズキンはこんなことしないよ。アカズキンは……」

その言葉を言ったと同時に私の首ははねらた

私が最後に見た光景は

黒い頭巾を被った少女が

目に涙を浮かべていた光景……

私を食べる？（後書き）

こんにちは那須1号です

なかなか分かりズライ文ですいません

更新も遅くてすいません

慣れてないので誤ってばかりですが宜しく願いします

わたしを食べるのか？

―ザッザッザッ

暗い森の中を1人の少女が走って行く
その足取りはけて良いとは言えない

―ハアハア

息が荒い

苦しくて今にも倒れそう
止まればいいのは分かっている
でも止まればアレを思い出す

「私は悪くなかったのに。あいつが・アイツがいけないのになん
で信じてくれなかったの

―ッ、うっ、ひっく、ひっく・・・あいつがいけなかったのに」

「あのウサギがあんなこと言わなければ、よかったのに・・・あんな
こと言わなければ、

っく、ひっく、アイツのこととも思い出さなかったのに」

少女の足は止まり目からは大粒の涙がこぼれていた

―ひっく、ひっく、・・・あぐううう、うあっ、うえーん、うえ

$$\begin{array}{c} \text{I} \\ \hline h \end{array}$$

小さい子どもが泣き叫んでいる

「やめなさい、その子どものような泣き方は」

「にゅふふ馬鹿な子。だからきみは選ばれないで私が選ばれたんだよ」

「バイバイ、馬鹿な子…うつん、さしずめきみには馬鹿な烏が似合
つてるよ」

思い出したいくない、あのころの思い出なんて

いや、いや、いや、やめて、やめて、やめてええええええええええ

ええええええええ

「どうしたんですか？」

!?

いつのまにいた……の？

「こんにちはお嬢さん」

服の袖で目の周りを拭いたらようやく分かった

「っ、ひっく、こんにちはカメさん」

私の目の前にいたのは年老いたカメさんだった

私はにっこり笑った
今度はカメさんも笑った

「それでは、もうそろそろいこうかな？きみの邪魔をしては悪いから」

カメさんは後ろを向いて立ち去ろうとした

―クスクス

「……」

カメさんはもう一度こっちをみた

「ねえカメさん」

笑いながら丁寧にカメさんと呼んだ

「なんだい？」

年をとったカメさんの顔は少し不思議そうな顔をしながらもやさしさに満ちていた

（優しい瞳・・・こんな目を慈愛に満ちてるって言うのかなあ？アノヒトがカメさんみたく優しくかったら私選ばれてたのかなあ。）

「町がやられた・・・って言葉最近よく聞くよね」

カメさんの顔が少し曇ったが気にせず話を続ける

「夜になる前まではたしかにみんないたのに次の日の朝になると町には誰もいなくて、あっ…でもケチャップみたいな真っ赤な血だけ

は残っているって話しなんだけど」

カメさんはさっきまでの顔とは逆に、とても暗い顔になっていた（さっきまではあんなに優しくそうな顔だったのに……。私のせいだよね。あんなに明るかった顔が一瞬で暗くなるなんて……。でもそれがいい。面白いなあ。まるで首と胴体が切り離された子みたい。少しずつ血の気が無くなるの。）

「その話しか……」

「うん」

子どもが大人になんでも聞きたがる無邪気さというナイフ（カメさんをもっと、もっと、もっと、キズツケタイ。）

少しの沈黙のあとカメさんは真面目な顔で言った

「私はそれで大切な友を失った。」

「……そうなんですか」

あえて冷静を装った

でも本心ではこんな話を聞くのは初めてだったから驚いた

「そいつはとても良いやつだった」

カメさんの目に光るものがあつた

「はじめは信じられなかったさ……。でも日が経つにつれ現実感がわいてきたのさ」

「可愛そうに」

こんな思いをした人に出会ふのは初めてだ
でも話しは別

（あなたをキズツケタイノ。）

「ねえ、あなたのその友達についてもっと聞きたいの、いい？」

「そうかい、いいよ」

（残念。意外とあっさり。その友達について聞けばカメさんのキズツク顔が見れると思ったから）

「それじゃあ・・・その友達の―」

「その前にひとつ良いかな？」

いきなりカメさんが割り込んできた

「名をたずねる時はまず自分から・・・だろう、そんなことも分らないのか？」

おかしい・・・カメさんがおかしいの、あの優しかった瞳が変わったの・・・見たことがある、でも誰の目、誰の目なの、

子どもが大人になんでも聞きたがる無邪気さ。その無邪気さみたいな鋭いナイフで、カメさんは私の胸を突き刺した

「ダカラオマエハエラバレナカッタンダヨ」

「！！！」

思い出した、何もかもを・・・

怖くて、怖くて、怖くて、記憶の奥底にしまったのに

怖い、怖いよお

もう、カメさんなんて見れない

あの瞳も

あの慈愛に満ちてた瞳も

あの優しかった瞳も

この怖い瞳も

もう見たくない

・・・・・・アナタダッタンダネ

カメさんがもう一度、無邪気さというナイフを持って、今度は深く私の胸に突き刺した

「そうだなあ、馬鹿な鳥には難しいかもしれないけど質問は、……アカズキンヲオエテイルカイ」

アカズキン……ヤッパリアナタダツタンダネ

ナイフで刺されたところから血が出ていく

もう二度と思い出したくないから記憶をハコに入れて、何回も鍵をかけて記憶の奥底にしまったんだよ

でも、あなたは簡単にハコ見つけ出して、鍵なんか関係なくハコを壊して開けちゃった

私のハコを……

私が大切にしたモノは全部あなたが壊したし、奪った

私のハコ、私のトモダチ、私のオバアチャン、そして私のアカイズキンモ……

やめて、もうこんなことは……

顔からどんどん血の気が失せていく

まるで首と胴体が切り離された子みたいにならずに血の気が無くなっていく

体の力が……ぬけていく

私は草の上に倒れた

嫌いな食べ物ってあるから

起きてみると朝になっていた
顔に日光がかかって眩しい

かなり泣いたから目がはれていてなんだか目が開けづらい
服の裾で目をこする

「あ…服…」

—汚れてたんだ
小さく呟く

昨日の夜ウサギさん達を食べてその後カメさんとお話して…
アカズキンのことを…

………

カメさん

いなくなってる

足を引きずりカメさんがいたところを見ると私のナイフとフォーク
が置かれていた

そっか

あの町を出るとき投げ出してここまで来たんだ

「馬鹿みたい」

自分を罵る言葉

いつも言われ続けてたから自分で言ってみてなんだか新鮮な感じ

「馬鹿みたい」

もう一度言ってみた

フフフフフフ

貴方の言ったとおりだよ

貴方の言ったことで間違いなんてないよ

目を閉じ

記憶の糸を探る

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

花畑で二人の幼い少女が話している

一人は金髪の少女

もう一人は黒い髪の少女

二人ともおそろいの白いワンピースを着ているけど

服の大きさが違う

金髪の少女は半袖、黒い髪の少女は長袖の服を着ている

そしてその隣には七十歳後半になるであろうオバアサンが椅子に座っていた

その人からはその年独特の優しさがにじみ出ていた

そして、オバアサンが立ちあがり

「さあさあ二人とも、今日はお花摘の練習ですよ

立派なアカズキンになるには綺麗にお花を摘めないといけませんよ
では、綺麗にお花を摘んできてね」

そう言っただけオバアサンはまた椅子に座った

二人の少女は花を摘みに行った

数十分後

金髪の少女が帰ってきた

手には色取り取りの沢山の花があった

「まあ、可愛いお花なこと」

オバアサンは少女の頭をなでなでした

この少女は分かっている

どうすればいいのかを

「わあい、ありがとう

このお花はオバアちゃんにあげるの」

とびっきりの笑顔で渡す

そうすれば、ほら

オバアサンもとびっきりの笑顔で返してくれる

それから

沢山の時間オバアサンとお菓子を食べていた

沢山の時間オバアサンとお話していた

とても幸せな時間

私も入りたい

私もアノナカに入りたいの

でも、それは叶わない

オバアサンが立った

「さて、貴方とのお喋りは楽しいけれどもう一人の子ともお喋りが
したいわねえ」

合図だ

いそいで行かないと

私は走ってオバアサンのところへ行った

ハア、ハア・・・

「遅くなつて、ごめんなさい」

オバアサンは微笑んでいる

でも、この顔は…

「いいのよ、それよりなぜそんな格好なのかということとお花はどうしたのか教えてくれない？」

今私の白かった服は土の色で茶色に汚れていた

それにオバアサンに頼まれた花もない

「それは…」

答えられない

むしろ答えてはいけない

私が答えないでいると

金髪の少女に向かって

「貴方は家に帰っていなさい」

と優しく言った

「分かりましたあ」

と言いオバアサンと私に軽く会釈をし、そして私にか見えないよう笑いかけ家に行った

金髪の少女がいなくなると

オバアサンの顔から笑みが消えた

無表情じゃなくて

怒っているのと楽しい顔が混ざった顔

私ができないから

オバアサンは怒っているしこれから私にすることはオバアサンにとつては楽しいことだから

「なんで貴方はいつもそうなの？」

「なんであの子はできるのに貴方はできないの？」

毎日私達はやることもある

それをオバアサンの気に入るようにやればいいけど私にはできないできないから

毎日オバアサンは私だけにアカズキンになるための練習をしてくれる

はじめにオバアサンが私のほっぺを叩いた

最初はびっくりしたので痛みはないけど何をされたか分かり始めた頃痛みが襲ってくる

「ごめんなさい、ごめんなさい」

ひたすら謝る

でもオバアサンはやめない

今度は私のお腹を蹴った

「げほっ、ーげほっ、げほっ」

痛い

食べたものを吐き出しそうになるでも

もしそうしたらオバアサンの機嫌が悪くなって余計にやられる

「ごめんなさい、ごめんなさい」

いつの間にか私は泣きながら謝っていた

「ひっく、えっく、ごめんなさい、ごめんなさい――」

涙で視界がぼやけていたけど間違えてはない

ここから少し離れたところで

あの、金髪の少女がさも愉快そうにこちらを見ていた

今から数時間前

オバアサンがお花を摘んできなさいといったので私は花を摘みに行
った

私とあの少女は別々の方向へ行った

しゃがんでオバアサンの気に入りそうな花を見つけるため一生懸命
探した

ようやく自分でも納得のいくような出来になった時にはだいぶ時間
が経っていた

立ち上がると足が痺れてなかなか上手く歩けない

ようやく痺れがとれオバアサンのところへ行こうとして二、三歩歩
き始めた時

「ねえねえ、どこ行くのぉ？」

後ろから声がした

止まっではいけないのに足が止まってしまった

歩くことが出来ず、振り向くことさえも出来ない

―来た

分かっていた

この少女がこのまま私を行かせてくれるはずがない

「まさか、オバアチャンのところじゃないよね？」

声の主が私の正面にきた

「そんなお花を持ってえ？」

金髪の少女：

「あのねーわたしい、オバアチャンと沢山お話したいからー」

そう言っただけと立っていた私から花を取り上げ

そして

その花を地面に叩きつけ足で潰した

「にゅふふふふふ」

これでオバアチャンのところ行けないね
でもわたしいいことしたでしょ

だってこんな花もらうオバアチャンが可愛そうだもん
にゅふふふ

ってあれれ泣いてるのお？」

「えっ？」

手をあてて見ると

泣いてた

また悪いことを言われてしまう

服の裾でごしごし擦る

でもなかなか涙は止まらない

「私泣いてなんかーキャッ」

さっきまで正面にいた少女がいなくなっ
て私の後ろにいき思いつき
り背中を押した

急な衝撃に私が堪えられるはずもなく無様に転んだ

転んだために私の白い服は汚れてしまった

「にゅふふふふふ」

あー！！！！

いけないんだあ

お洋服汚してえ

これでオバアチャンのところに行ったら怒られちゃうね
ねえ、どうする？

それでもオバアチャンのところに行くう？」

答えは決まっていた

私の答えに金髪の少女は愉快そうに笑い

「お前がアカズキンになれるはずがないんだよ」

という言葉をはき、走っていった
もちろん

オバアサンのところへ

オバアサンともっと一緒にいて美味しいもの食べてお話ししてずっとずっと一緒にいたいのだからもっと私を見て

―オバアサン

.....

小さい時の思い出でいいことなんてなにもなかった
目を開ける

やっぱりなかなか人は変わるものじゃないんだね
そこには小さい時と変わらない泣き虫の自分がいた

服の袖で顔を拭いた時思い出した

服が汚れたままだったんだ
洗いに行かないと

川を探すため少し歩いた
そして小さな川を見つけそこで服を洗った

服を脱ぐと白い肌に無数の青い痣があった

この痣を見られないためにいつも私は長い服を着ていた
あのころオバアサンは

―貴方のためにやっているのよ

―貴方だけのシアワセの青い薔薇だからよ

―だれかに見せると貴方に幸せが来なくなるのよ
だから・・・

ダレニモミセテハイケナイ

と、そう言われていた

だからいつも長い服を着ていた

この青い薔薇は幸せの青い鳥みたいになつた私に幸せを届けてくれ
ると信じて疑わなかった

そう、私をアカズキンにしてくれると

「フフフフフフ、馬鹿みたい」

・・・気が付けばまた泣いていた

止まっていた手をまた動かした

時間が経ったためかなかなか汚れが落ちなかった

「汚れが取れない？」

洗うのに時間が経ったためだろうか

最近汚れが取れにくくなっている

強く擦ってもなかなか取れないのでそのままにすることにした
「...このくらいなら分らないよね」

服を洗い、乾いた時にはもう日が傾いていた

ナイフとフォークを持って立ち上がる

私は昨夜カメサンとお話して思い出した
アカズキンのことを

「今回も私の邪魔をするんだね」

いつも貴方は私の邪魔をしてきた
貴方が私からなにかも奪っていつでも私は泣いているだけだった
でももう泣いているだけの私じゃない

アカズキンに同じ絶望をあじあわせるためにこの世界^{ものがたり}から貴方の友
達がいなくなるまで私は食べ^{けし}続ける

「ーそう、みんな…」

嫌いな食べ物ってあるから（後書き）

なんだか、こんなかんやで大変ですね

一気に2話なんか連続でやるもんじゃないですね

少し成長しました

貴方の嫌いな食べ物でいっばいに

「アカズキン様」

沢山の色とりどり花が沢山ある花畑にテーブルとイスが置かれていた
テーブルには、白のテーブルクロスが掛けられ、その上には紅茶と
クッキーやスコーンといった沢山のお菓子が並べられている

そしてそこに座っているのは

赤を貴重とした服を着て、あどけなさのこった顔の少女が座って
いた

金色の髪の上にかぶってっていたのはアカイズキン

これが

アカズキンの証

アカイズキンはアカズキン以外はけしてかぶってはいけないとされ
ている

「ん？ああカメサン、ご苦労様でしたあ」

何を考えていたのだろうか慌てて答える

「確かに、黒いずきんをかぶった少女と会ってきました」

黒いずきんと言う言葉を聞き目が輝く

「やっぱりやってたのはアノコだったんだあ

んにゅー嬉しいなあ」

まるで欲しい物がてにはいった時のような満面の笑み

「それじゃあこれまでのことを話してほしいの」

私は今までのことを話した

それをアカズキンは興味深くさも、おとぎばなしでも聞くかのよう
に聞いていた

「にゅふふふふふふふふふふふ」

すべてを話し終えアカズキンは笑い出した
とても特徴がある笑い方

ようやく気がおさまったのか笑いがおさまった

「にゅふふふ、まったく可笑しなこと考えるんだからあ
私に逆らおうなんてなんて馬鹿なんだろう

あのころから全くなわってないよ

しょうがないなあ」

…ん」

少しお仕置しにいいこうかなあ？」

それからしばらく考え込んだ

「うん、

カメサンそれじゃあ

馬鹿なアノコの所へ行こうか」

お気に入り紅茶を飲み終えイスから立ちあがる
うにゅ〜〜と言いつ体をのばす姿からはこれから遊びに行くくらいし
か想像できないだろう

「それじゃあ、行こっか
つて、あつっ！！！」

忘れてたあ~~~~~
私の大切なバック忘れてきちゃったあ
どーしよう」

今にも泣き出しそうな顔

そんな少女に優しく語り掛けるように言う

「大丈夫です、ここにいますから」

差し出したのは赤く大きな、いや、大きすぎるバック
それを見せると

「ああ〜ほんとだあ！
よかったあ

見つかって

これがなくちゃあ
お仕置できないもんね」

そう言つて中身から出したのは
可愛い人形や面白い絵本
ではなく

身の丈ほどの大きな

ノコギリとカナヅチ

それはあまり手入れをされていないためか
ところどころに

黒ずんだものが付いていた

「ああ〜ん

汚れちゃってるよお〜

う〜ん

もうそろそろ洗おうかなあ？」

ノコギリを青い空に掲げ悩んでいる

「こんな青い空だった

アカズキンと出会ったのは

大切な友を失った悲しみで生きる気力さえなくしかけた時だった

「アナタ、カタキガトリタクナイ？」

目の前にいたのはアカズキンだった

まだ幼い少女がこの言葉を言った時は驚いた

だが、

誰が何のために大切な友をコロシタノカそれを知った時私の前にあったのは憎しみだけだった
そして、アカズキン従った

トモノカタキヲウツタメニ

ふっ、私は幼い少女の姿をした悪魔と契約してしまったのか
だが、契約したからにはやるしかない

「参りましょう、アカズキン様」

少女は満面の笑みで答えた

貴方の嫌いな食べ物でいっぱいに（後書き）

まあ、ここで区切りつけても良いのでしょうか？

これからアカ、クロズキンが会っているいろいろやっていく感じになります

いつものことながら更新遅いですがよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171b/>

黒ずきんと美味しい動物達

2011年1月13日15時02分発行